

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行  
第3回業務推進全体会合  
議事録

日時：平成26年12月19日（金） 13：00～15：00

場所：TKP スター会議室根津

出席者：15名（順不同・敬称略）

木村<sup>浩</sup>（PONPO）、足立（元気ネット）、植木（元気ネット）、円満字（PONPO）、大石（PONPO）、神崎（PONPO）、鬼沢（元気ネット）、木村<sup>謙</sup>（東大）、渋谷（元気ネット）、竹中（PONPO）、土田（関西大）、丸山（PONPO）、三谷（原子力コミュニケーションズ）、諸葛（PONPO）、第1期フォーラム参加者

配布資料

3-0. 議事次第

3-1. 第2回業務推進全体会合議事録案

3-2. シンポジウム配布資料（頭紙）

3-2-1. プロジェクトの目的・手法・枠組み（パワーポイント資料）

3-2-2. 市民と専門家の意識調査（パワーポイント資料）

3-2-3. コミュニケーション・フィールド「フォーラム」の効果（パワーポイント資料）

3-2-4. 「フォーラム」の社会実装に向けて（パワーポイント資料）

議題

1. アンケート・インタビュー分析結果の検討
2. システム化について
3. その他

※議論の詳細については、逐語録に記録されている。

## 1. アンケート・インタビュー分析結果の検討（配布資料 3-2-2、3-2-3）

資料 3-2-2 に基づき、土田氏からアンケートの分析結果が示された。続いて、資料 3-2-3 に基づき、竹中氏からインタビューの分析結果が示された。（なお、これらの資料は 12 月 20 日に行われるシンポジウムで配布されるものである）

その後、活発な議論がなされた。主な意見を以下に示す。

### 【アンケートの分析結果について】

- ・ 2014 年のフォーラム参加者は、母集団に比べ原子力に否定的な意見にやや偏っているというデータがあるが、インタビューではそのような傾向は見られなかった。  
→母集団との比較に用いたのはフォーラム参加前のデータである。フォーラムに参加することにより、否定的な意見をあまり表に出さなくなったのかもしれない。
- ・ フォーラム参加前後の参加者の意識の変化から、「専門家が、専門家としての役割を認められた」ということが言えるのか？  
→そういった傾向は見えるが、サンプル数が少ないので、断定的なことは言えない。  
あくまでケーススタディである。
- ・ フォーラム参加前後の参加者の意識の変化を見ると、2014 年参加者は、2013 年参加者に比べ、変容が少ないように思われる。  
→2014 年参加者は、2013 年のフォーラムの記録を見てから参加したのかもしれない。  
⇒インタビューやフォーラムでの発言から考えると、記録を見てから参加した人は少ないように思われる。  
→母集団の性質が変容しているのかもしれない。首都圏住民、原子力学会員ともに原子力への関心が低下している（学会員は、世論等に影響されて意見が変わってきているのかもしれない）。

### 【インタビューの分析結果について】

- ・ 市民と専門家の間での変容がまとめられているが、市民同士、専門家同士の間での変容についてもコメントすべきだろう。
- ・ 「専門家が、自身の考え、主張、価値観、悩みや苦労を伝えることの重要性に気づいているか疑問」とあるが、専門家は、「そういうことは言うてはいけないことである」と思い込んでいる可能性があるのではないか。その思い込みの結果、このような気づきを得るきっかけを失っているのではないか。  
→一般的に、市民は専門家に対して知識を求めている。その反面、市民は知識だけが供給されると反発する。専門家は、知識だけでなく、上記のような情報を織り交ぜて話をする必要があるのだろう。

## 2. システム化について（配布資料 3-2-4）

木村<sub>浩</sub>氏より、資料 3-2-4 に基づき、シンポジウムにおいて、システム化について発表する内容が示された。

## 3. その他

木村<sub>浩</sub>氏より、シンポジウムに関する情報が共有された。

- ・ あらかじめ質問票を配布し、講演終了後の休憩時間に回収する。パネルディスカッションでは、会場から寄せられた代表的な質問に回答する時間を設ける（時間の余裕があれば、別途会場から質問を募る）

また、今後の日程が告知された。

- ・ 第 4 回業務推進全体会合は 2015 年 3 月に開催予定。報告書の内容を確認する。
- ・ 日本原子力学会春の年会では、2015 年 3 月 20 日にセッションを行う予定である。

以上